
夜行

山野水雛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜行

【Nコード】

N9442M

【作者名】

山野水雛

【あらすじ】

黒から光へ、そして黒へ。

駄文で、墮文です。

足りない。

足りないよ。

水が、風が、酸素が、音が、自分が。

求められてるのに。

学力、カリスマ性、容姿、愛情。

流れ落ちて行く。ただそれを見てるだけ。

全部流れて、黒くてどろどろした所に溜まっていく。

そこはあたしの快樂、絶望……

「陽子？陽子っ！」

誰？眩しくて見えないよ。

頬を引っ張られて、ぺちぺちと叩かれる。

影になって見えなかった人形は、あっと言う間に馴染みの形に変形した。

「いつまで寝てるつもりだ。」

「壱人が起こしてくれるまで。」

額に手をやって、髪を掻き上げるあたしを見て壱人は顔をしかめた。

「五、六限の授業もちゃんと起きてろよ。」

「んー、壱人が起こしてくれるなら。」

少し上目遣いで横を見ると、壱人は頬の色を変えて無理に空を仰いだ。

単純か、可愛い。

壱人の髪を撫でたり梳いたりしていると、彼がふいにあたしを見た。

何を見てるんだろう。

壱人の目にも、あたしの黒い小さな溜まりが見えるのだろうか。

嫌だ、見るな。

あたしの中は、あたしだけが知るんだ。

沈黙が、地面を這った。

ふっと壱人が目を細める。
分かってるよ、とでも言いたげに。

「壱人…あたしが好き？」

「……変な事聞くんだな。」

「あたしは…壱人が好きだよ？」

壱人が笑う。綺麗な顔が少し歪む。
折り紙に最初の折り目をつけるみたい。

「…俺って単純だな。」

壱人の指があたしの唇をなぞる。

その唇から落ちる何かを掬い取るように、二つの唇は重なった。

平穏を乱す呼吸。

あたし達は黒に飲み込まれる。

あたしの夢に二人で堕ちる。

悪くないんじゃない。

チャイムが鳴った。

（後書き）

久しぶりに書いたと思ったら。

自分でも開いた口をこじ開けるような駄文が出来上がりました。

皆さんの、苦いおやつになれば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9442m/>

夜行

2010年10月11日23時27分発行